



種まく人

園長 藤堂俊英

幼稚園の前に広がる収穫の終わった田園風景を、今年もいろいろないのちの糧を育ててくれた大地への感謝の思いをこめながら眺めていると、ふと農民画家といわれたミレーの作品を思い浮かべました。「種まく人」「落穂拾い」などと共によく知られているのが「晩鐘」です。日本でも「夕焼け小焼けで日が暮れて 山のお寺の鐘が鳴る・・・」の童謡にあるように、ひと昔前は帰りの時間、一日の仕事に一区切りをつける時刻になると寺の鐘の音が聞こえるという音の風景がありました。以前、JRの新宿と渋谷駅の電車の発車を知らせる音楽が、寺や教会の鐘の音をヒントにして作られたことがありました。ミレーは「晩鐘」で日に3回撞かれる教会のアンジェラス（天使を意味するエンジェルスのラテン語）の鐘の音に合わせて祈りを捧げる農民夫婦の姿を描いています。あの絵を見るたびに、一日のまた一年の終わりの折には、後ろを振り返りつつ明日に思いを馳せる、そういう祈りの時間の大切さに気付かされます。次にあげるのは山本なお子さんの「おしまいなさいましたけ」という詩です（『さらりさらりと雪の降る日』より）。

おしまいなさいましたけ
 向かいの家の お嫁さんだなぁと思いながら
 すぐに出て行くのが 惜しいようで
 もう一度声を聞きたくて ぐずぐずしている
 おしまいなさいましたけ というのは 夕暮れ時のあいさつ
 もう日も暮れてきたけれど 農作業をしまいに
 家に入ったかどうかを 問うている
 「おしまいなさいましたけ」 「食べられませか」
 向かいのお嫁さんの 笑顔といっしょに カゴいっぱい さやえんどう
 くちなしの花の匂う戸口で
 私も この美しいあいさつを そっと言ってみる
 「おしまいなさいましたけ」



一日の仕事に一区切りをつける時、よく「今日はこれまでにして、おしまいにしようか」と言います。「おしまい（御仕舞）」とは、やめにすること、終わりにすることですが、辞典によれば「夕方から夜にかけての挨拶の言葉」として江戸時代には使われていたようです。今日一日をそれぞれの持ち場で、ともかくも働くことができた安堵の思い、仲間へのいたわりの気持ち、それが明日にもつなげようという希望の種まきとなったのがこの夕暮れ時の挨拶の言葉といってよいでしょう。そこには、一緒に働き、一緒に暮らし、一緒に生きる、「ともに」という共感の意識が波打っているのが感じられます。今年もはや一年の最後の月になりました。私たちの暮らしから特色ある夕暮れ時の挨拶の言葉が消えかかっているのは、「ともに育つ（共育）」という意識の退行や、明日につなげる希望の種まきと心を満たしてくれる収穫の喜びを忘れたことに由来するのだとすれば、このような美しい夕暮れ時の挨拶の言葉を復活させたい思いに駆られます。